



「図書館の逆襲」

幼児教育学科 学科長 笹井 弘

私は学生の時、読書を取るか制作を中心とした実践的活動を取るか悩んだ末、読書を捨てた。理由は、読書と実践を時間的にうまく区切れなかったのである。

読書しないことと図書館に行かないことは、ほぼ同じである。自慢にならないが、当時大学の図書館も地域のそれも一度も行かなかった。今でも目的がないと足が向かない。だから今回のこの記事の依頼をされた時は、図書館の逆襲だと思った。綴る話がない。

そこで「図書館」と云うキーワードで私の頭の中を検索してみると「図書館・建築」である記事を思い出した。

一つは、数年前の美術雑誌の記事である。約100年前の建物が国立国会図書館国際子ども図書館として開館した話だった。場所は上野公園内。明治39年、帝国図書館として建設、国立国会図書館支部として使用されてきたが、平成12年(2000年)そのルネッサンス様式の洋館を子ども国際図書館として保存、再生を果たした。設計には安藤忠雄氏が加わり耐震補強した旧館の半分をガラスで包み、かつてのレンガの外壁がラウンジ部分の内壁となった。当時の漆喰装飾や階段装飾手すりなども復元保存させている。絵本などが並ぶ子どもの部屋、本のミュージアム、世界を知る部屋、お話の部屋、資料室などからなる。特に子どもの部屋は天井が全て照明、床やソファなどに寝ころんで本を読んでも影が出来ない光天井である。

もう一つの図書館は、奇跡のまちづくりと呼ばれる小布施町の町立「まちとしょテラソ」である。設計は古谷誠章氏で街並みの邪魔をしない近代的平屋、ガラス面を広く取り昼間は採光に、夜は内部から漏れた光が駅から商店街や周辺施設への行灯の役割を果たしている。図書館機能を中心に据え「学び」、そして「子育て支援・交流・情報発信」の場として開放的空間が広がる。また、周辺施設との有機的連携も目的にしている。

今夏、二つの図書館を訪れた。行く前に「図書館・建築」で世界と

日本の面白そうな幾つかの図書館を発見することができた。本を余り

読まない人間が、図書館の本来の機能とは別の事ではあるが、図書館に

興味を持たされたことは、図書館の逆襲のお陰と感謝している。本学図書館は、

私の研究室の目の前、たまにはブラウジングでもと思っている。

目次

「図書館の逆襲」	
大身边整理 (案)	
謎に出会う場としての図書館	
楽譜の話	
『懐かしい本』	
『今までに会った絵本と思い出』	
読んできた本とこれから	
思い出の本	
図書館ガイド	
本学教員の新刊著作	
図書館ニュース 第12回七夕文学賞	

CONTENTS

幼児教育学科	学科長	笹井 弘	1
総合文化学科	学科長	中西満義	2
幼児教育学科	准教授	小川 史	3
幼児教育学科	専任講師	平澤節子	4
幼児教育学科	1年	石川麻衣	5
幼児教育学科	2年	木次愛美	5
総合文化学科	1年	笹川千紘	6
総合文化学科	2年	大平真衣	6
			7
			7
			8

大身辺整理 (案)

総合文化学科 学科長 中西 満義

近ごろ、自宅と研究室と、併せて三十本を超える程の書籍の中から、一冊が見つげ出せない、ということがあった。背文字を確認することが難しい冊子体のもので、確かこのあたりにと心当ての場所を何度か探してみたものの、見つからない。諦めかけたころ、まったく別な場所の乱雑に積まれたPR誌の中にそれは眠っていた。これは幸運な一例だが、論文のコピー、紙焼きの文献資料、リーフレットとなると、努力空しい結果の方が多い。情報やものは集めるだけでなく、それを有効に活用するために整理しておくことが大切とは、普段、事あるごとに吹聴していることだが、自身の為体からすると、その言葉はなんとも虚しく感じられる。

総量からするとたいしたものではないが、それでも、塵も積もればの譬えで、山を掻き分けけるのは容易なことではない。八年前、住居を改めたとき、書庫スペースと一室を確保した。それ以外の場所には本を置かない、というのが家人との取り決めであった。使い勝手を考えて、和歌、西行、中世、仏教、芭蕉、近代評論、雑誌など、あらゆる分類を試みて配置した。はじめは若干の余裕があったのだが、数年が経つうちにいずれも書籍や資料が溢れ、收拾のつかない状態になってしまった。書棚を買い足したり、和本と同じように平置きにしてスペースを最大限に活用したりと、なんとか凌いできたが、それでも立ちゆかなくなってきた。

ひところ、文庫本や新書本の二重買いを繰り返した。もう一冊持っていてもいいか、あることは分かっているがすぐに探し出せない、が主たる理由だが、ほかに、書名が気になってまた買ってしまった、というものもあった。老化の始まりかと心配したが、その後症状は悪化していない。更にいけないのは、古書の価格が相対的に値崩れしてしまったことだ。安かったのが買った、とは、我ながら呆れかえってしまう。上のようなこともあって所蔵量は増すばかり、必然的に書棚に収まりきらないものは、後ろを塞ぐかたちで手前スペースに平積み状態に、もしくは、収納ボックスや段ボー

ル箱に仕舞われて休眠へと追いやられ、結果、事態はさらに深刻なものとなった。

現状を打破する方策は？お手上げ状態のまま、解決しようという意志も薄弱なのだが、ふと、どうにかしないと、と思うときがある。スペースを拡張するか、要らないものは捨てる、即座に思い浮かぶ二者択一はどちらも選べないでいる。領土拡大を主張して侵攻する勇氣は、もちろん、ない。そして、近時ブームの断捨離など、俗人の悲しさか、もったいなくてできない。さすれば、残された方途は、いまあるものを確認して、整理、分類を試みて適切な場所に保管するということしかないだろう。大勢の人が利用する図書館ではないので、NDCは必要ないが、自身の分類法を模索しているところである。PCのファイルにおいても同様の問題を抱えているが、これから先の時間を考慮しつつも、やはり、このあたりで一度、いろいろな贅肉を削ぎ落とすことに挑まなければならないのだろうか。身辺整理にかかわる思索は堂々巡り、いまだ(案)がとれない状況がつづいている。



謎に出会う場としての図書館

幼児教育学科 准教授 小川 史

図書館には研究者の格闘の痕跡が山のように置かれている。いったい、この研究者とは何者か？

思うに、研究者とは、謎をかけられた人間のようなものである。その謎は、なにかのきっかけで頭から離れなくなり、謎解きの手がかりアリと思えばどこにでも赴き、寸暇を惜しんで古今の書物を紐解く。その謎はきわめて多様であり、謎に入り込むきっかけもさまざまだ。

たとえば、箸を使う日本人がたまたま洋食屋に行きナイフとフォークをうまく使えずに失笑を買ったとする。そのときその人は、そもそもなぜ食事のときに箸を使う人とナイフやフォークを使う人がいるのかと自問する。そこから、箸はどの地域でいつから使われているのか、箸を使用する文化には他にも共通の事柄があるのか…などと調査を始める。こうなるともはや文明論である。あるいは、コンビニで買おうとしたおにぎりをぼんやりと見ていたら、実家で親が作ってくれたおにぎりを思い出す。実家にいればおにぎりに金を払うことなどないのに…。そもそもなぜこのおにぎりは120円なのか？ 実家のおにぎりは120円に相当するのか？ どうやって値段が決まるのか？ そして自分はなぜ何の疑問もなくレジでお金を払うのか？ こんな具合にして貨幣経済の特性を調べようとする人もいるかもしれない。

だが、謎がはっきりとした形を取らない場合も多い。自分のなかでもやもやとした感覚を抱き続け、なにかに囚われていることは確かだが、それが何かわからない。それを問いの形で提示することは、じつはきわめて難しい。その提示の仕方を誤るとその後の進路があらぬ方向へ向かってしまう。だから、適切に問いを提示することが研究者にとってきわめて大事なのだ。

このような研究者が、大学で教鞭を取る。謎をかけられた人が、まだ謎をかけられていない人たち、あるいはかけられているがそれが何かわからない人たちに、適切に謎をかける！ これは、ある意味でありがた迷惑な行為だ。なぜなら、謎を避けても愉快地暮ら

すことはできるのだから。そして、研究者がつねに適切に謎を示しているとは限らない。かつてトーマス・マンは作家を山師のようなものだといったそうだが、もちろん、マンは作家と山師を等値したのではない。むしろ、書き手にとっても未知な部分を含んでいる枠組みを公衆に提示するわけで、その行為に山師的な要素が含まれていないとはいいい切れないという意味だ。

だが一方で、マンの小説を読んで人生の実相に触れた思いを抱く人がいるのと同じように、研究者がかけてくる謎にかかりあうことで、それまで見たこともないものが見えてくることもある。見たこともないものとは、どこかの外国にあるばかりではない。むしろ、日々の生活のなかにある。目の前にあるのに見えていないものを見ることができるといえる。このようにいうとますます山師のようだ。だが、研究者の仕事の大半はそうしたこととかがわっている。民俗学者の宮本常一のように、かつて庶民が何気なくはいていた草履から説き起こし、多くの人に見えていなかった日本文化の壮大な姿の一端を見せてくれるような強者もいる。

研究者はたいてい、自分の問いかけが、多くの人にかかりがあると信じているものだ。それが受け止められるかどうかはわからないが、受け止められたとき、そこには独特な関係が生まれる。図書館や古書店の本棚のあいだをぶらぶらと歩きながら本を手にとると、強いシグナルを送ってくるものがある。そうしたシグナルを感じられる時間は、遠い場所に生きていたひととの交流の時間だ。学生生活のうちの少しでもそうした時間をもてた人はしあわせだと思う。



楽譜の話

幼児教育学科 専任講師 平澤 節子

音大生だった頃、ピアノの練習室と図書館をよく往復したものだ。クラシック音楽全般にわたり使用する楽譜の選定は演奏する者に欠かせない為であるからだ。楽譜には作曲家のオリジナルまたは限りなくオリジナルに近い信頼性のある原典版と、その弟子や高名な演奏家・研究者による校訂版、時代検証に基づき現存するエディッションの矛盾を指摘したCritical Edition（批判版）など様々ある。大学1年生の時、師事する教授からドビュッシーの前奏曲を課題に出されたことがあった。当時私は楽譜に関する知識があまりなく、指定された曲名を持つ楽譜さえ準備すればという安易な思いがあった。その時奇しくも私が手に入れたのはニューヨークシャーマー社の出版するCritical Editionで、それはパリでピアノの研鑽を積んだ我が師にとって異端なものであった。「君は面白い楽譜を持ってきたものだ」と繁々眺めては、レッスンとしてまともに取り合って戴けなかった。悔しさと共にレッスン室を後にし、来週までに何とか新しい楽譜をという思いで直ちに銀座山野楽器に向かった。書棚には同名のデュラン版(パリ)、ヘンレ版(ミュンヘン)、ペーターズ版(フランクフルト)のほかにも国内版が数々並んでいた。

それから私の図書館通いが始まった。母校の国立音楽大学附属図書館は国内外の楽譜を始め、音楽史や音楽美学に関する図書など音楽関係の蔵書が豊富なことで知られ、ベートーヴェンの初版コレクションなど貴重な資料も収められている。私はレッスンで新しい課題を出される度に図書館に赴き様々な版を借り出し、弾き比べするうちに楽譜の奥深さに引き込まれていった。特に校訂版は、編集者により装飾音やフレーズ、臨時記号が異なり、更には楽譜上に書かれた音そのものが原典版と違っているケースもあり非常に興味深かった。また、ピアノ科の学生同士会話をする中で、同じベートーヴェンのソナタでもヘンレ版・シュナーベル版・ペーターズ版など師事する先生によって指定される版が異なり面白かった。今でこそ作曲家によって使用すべき版、スタンダードが分かるようになったがその当時は試行錯誤であった。

昨年はショパン生誕200年のメモリアルイヤーで、

ショパンに関連したコンサートやイベントが世界各国で開かれた。ショパンは数々のピアノ曲を作曲し弟子も多いことで知られている。ショパンの楽譜は母国ポーランドのパデレフスキ版、エキエル版(ナショナル・エディッション)を始めとし、ヘンレ版、コルトー版(サラベール社)、ミクリ版(シャーマー社)、ウィーン原典版、ペーターズ版、クロイツァー版(音楽之友社)など多数ある。これらは自筆譜や弟子による筆写譜を基に出版されたフランス初版、ドイツ初版などに校訂の手が加えられているものだ。近年の傾向としては、四年に一度開催されるショパン国際ピアノコンクールでナショナル・エディッションの使用が推奨されていることからこの楽譜の需要が高いようである。私も学生当時はよくパデレフスキ版とコルトー版を使用した。現在ではナショナル・エディッションとクロイツァー版を愛用している。

そして翌週、新しくデュラン版を手に入れた。教授は譜面台に置かれた楽譜を一瞥し「それでは始めよう」と、私はドビュッシーのレッスンによく辿り着くことができた。少ない言葉ではあったが未熟な私に示唆を与え、適したエディッションを選択することの意義をご教示下さったのである。ピアノに限らず教材をよく吟味するという点で保育者もまた然りであると、今改めて恩師への感謝の念を新たにするのである。



◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 懐かしい本

幼児教育学科1年 石川 麻衣
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

幼稚園に通っていた頃、私はメロンの絵本がなぜか大好きでした。その絵本は教室の棚にいつも置いてあって、毎日のように読んでいました。内容は、メロンの説明だけで物語ではなかったのですが、無我夢中に読んでいた気がします。ちなみに、みなさんには思い出深い絵本や本はありますか？もし時間があったらその本を探して読んでみたらどうでしょうか。見つからなかった時や忙しい時は、頭の中でその本のあらすじを思い浮かべるだけでも良いと思います。きっとあつという間にあの頃に戻れると思いますよ。私も、メロンの絵本を思い浮かべると幼稚園児の頃に戻ったような気がちょっぴりします。そしてとても懐かしいと思う気持ちと一緒に、老いた悲しみを少し感じます。

人には懐メロならぬ懐ホン（懐かしい本）というものが少なからずあると私は思います。例えば部活に励んでいた頃に読んでいた、その部活のテクニク本や部活に関係するスポーツ雑誌、青春時代を送る少女達が内容に共感し、感動のあまりに涙を流して読んだ恋

愛小説。進路に悩む受験生が読んで役に立った「必勝勉強法!」「小論文の書き方」「仕事辞典」のような本などなど…表紙を見れば「うわぁ懐かしいなぁこれ」と思う本があると思います。私の懐かしいと思う本はメロンの絵本や小学生の時に読み漁った偉人の本、また、中学生の時に読んだ『アルジャーノンに花束を』という本です。どれも懐かしい本です。

そんな懐かしい思い出深い本達を、今の私がまた読んだらどのようなことを感じるのかとても気になります。きっと再び読んだらあの頃の自分では気づけなかったことが発見できたり、読んだ時の印象がまた違ったものになったりすると思います。

最近は、本を読む時間がなかなか取れず、図書館に行くことも少なくなりました。でも、どんどん本を借りていろんな知識を得たり物語の世界を感じたりしたいと思います。今の自分が読む本はいずれ、未来の自分の懐ホンとなるでしょう。みなさんもぜひ図書館へ行って本を読んでみてはいかがでしょうか。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 今までに出会った絵本と思い出

幼児教育学科2年 木次 愛美
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

私が今まで出会った絵本はたくさんありますが、その中でも一番心が温まり、皆さんにもおすすめしたいのが『どうぞのいす』という絵本です。

さまざまな動物が出てくるこの絵本は、“どうぞのいす”と書かれた看板に置いてあるものかわるがわる動物が食べていくのですが、そうすると次の動物の食べるものがなくなってしまうため「次の人にお気の毒」と自分の持っている食べ物をどうぞのいすに置いていくという絵本です。

自分が満足するだけでなく、他の人に自分のものを譲るという思いやりが可愛い動物の絵と優しい言葉で描かれています。そして、この絵本を好きな理由がもうひとつあります。それはこの絵本は2歳年下の妹が、私が短大に入学して初めての夏休みの幼稚園実習の前に来た誕生日に「実習大変だと思うけど、良さそうな絵本探したから頑張っってね。」とプレゼントしてくれたからです。初めての实習ということで緊張や不安で押しつぶされそうだったのですが、妹が私のことを心配したり、応援してくれているんだと思え、とても嬉しく感動しました。その時の実習から全ての幼稚園、保育園実習で『どうぞのいす』を読んでいて、時案のねらいで立案した“読み聞かせを聞いて、友達や周りの人に優しくする気持ちを持つ

てもらおう。”といったことを担任の先生に褒めて頂いたことも、とても自信に繋がりました。

世界中に山ほど溢れる絵本の中で、本当にお気に入りの絵本に出会えるのはいつか分かりません。私の場合のように、出会いは突然やってくるのです。実習を重ねるにつれて、絵本に触れる機会は徐々に増えてくると思いますが、図書館をたくさん利用して欲しいと思います。

図書館にある絵本の中でおすすめなのは、『ぼちぼちのきかんしゃ』です。こちらも動物が主役の絵本ですが色がとても鮮やかで、絵が可愛く、ドキドキハラハラ、でも最後には心の温まる絵本です。この絵本を図書館で借りて授業で友達の前で読み聞かせしたときに「可愛い」ととても注目されました。その後、自分でこの絵本を買って実習先で読み聞かせたところ、子どもたちも目を輝かせて身をのり出して聞いてくれました。他にもおすすめしたい絵本はたくさんありますが、図書館には色々なジャンルの絵本があるので、お気に入りの一冊を見つけてもいいと思います。私が好きな絵本は、この先もずっと大切にしていきたいと思うものばかりです。大切にできる絵本に出会えるよう、これからもたくさんの絵本を見つけていきたいです。



読んできた本とこれから

総合文化学科1年 笹川 千紘



わたしは小学校の頃から本を読むのが好きで、よく本を読んでいました。小学校低学年の頃は絵本、中・高学年の頃にはファンタジーなど物語を読んでいました。

中学生になり、小説をよく読むようになりました。主に読んでいたのは、時雨沢恵一著の『キノの旅』や、あさのあつこ著の『The MANZAI』、恩田陸著の『ネバーランド』、滝本竜彦著の『ネガティブハッピー・チェーンソーエッチ』など冒険ものや青春もの、シリアスなものなどジャンルは様々でいろいろな本を読むのが好きでした。

特に中学の頃は、携帯小説、が流行してわたしもよく読むようになりました。携帯電話でも読んでいましたし、本の方でも読んでいました。今まで小説は縦書きが一般的でしたが、携帯小説によって横書きのものも普及していきました。携帯小説を読んで、横書きの小説は縦書きより読みやすいと感じました。携帯小説はわたしが通っていた学校も含め、女子中学生や女子高校生にとっても人気でした。それは横書きということと、恋愛ものが主流だったからではないかと思います。この頃は一番本を読んでいた時期だったので、表現力

や知識をたくさん身に着けることができたのではないかと思います。

高校に入り、評論を読むことも好きになりました。特に印象に残っているのが、国語教諭である担任からおすすめしていただいた竹内一郎著の『人は見た目が9割』という本です。心理学やコミュニケーションに興味のあるわたしにはとても関心のある作品でした。非言語コミュニケーションについて書かれているのですがさまざまな視点から書かれており、とても読みやすく、いろいろ学び得るものがありました。小説では授業で夏目漱石の『こころ』を取り扱ったために『こころ』が一番印象に残っています。『こころ』では人間のエゴイズムについて描かれており、人間の深層心理について触れていて面白かったです。

今までを振り返ると、小学校から中学校までは単に物語重視で読んでいたのが、徐々に自分の興味・関心につながるものを読むようになってきました。しかし、最近わたし自身活字離れしていつの間にかなくなっています。本を読むことで知識も増えていくので、気になった本は手にとっていきたいと思います。また、図書館も積極的に活用していきたいです。



思い出の本

総合文化学科2年 大平 真衣



あなたの記憶の中に思い出の本はありますか。今でも大切にしている1冊の本はありますか。

私は、子どもの頃から大好きな本があります。それは、今でも私の部屋の本棚にあります。角は摺れてページも黄ばんでいますが、今でも大切にしています。『みけねレストラン』という本です。

私とこの本との出会いは覚えていませんが、いつの間にか私の手元にありました。おそらく、母親がくれた本だと思います。子どものころから枕元に置き、寝る前に母親に読んでもらっていました。字が読めるようになると、毎晩自分で読みました。今でも、はじまりの1文を覚えています。

この本は、みけねこのすみれとぼくがレストランをひらくお話です。とは言っても、子どもですから実際に材料を仕入れてきて料理をするなんてことはできません。そこですみれが用意した材料は、なんと水面に映った雲でした。虫取り網ですくって採ってくるというのです。そんなこと実際にあり得ないわけですが、当時の私は、本当に網を持って水辺に出かけていました。池に映った雲を網ですくおうとしていたのです。

勿論、できるはずもなく、ただ網を濡らして帰っては怒られていました。

大きくなった今でも、この本を読むことがあります。本棚を掃除しているときや、探し物をしているときなど、ふと目に入ったときにどうしても読んでしまいます。大きな文字で、すべてふりがなのふってある本ですが、今でも夢中になって読み、毎回読んだ後に子どもときのことを思い出します。

私にとっては、この本が読書の楽しさを教えてくれた本でした。それからたくさんの本を読み、学校にあがってからは図書館にも通いました。おかげで、視野も人とのつながりも広がりました。まさに、私の世界、生きる道を広げてくれた本です。私の大切な宝物です。

あなたの記憶の中に、思い出の本はありますか。今でも大切にしている1冊の本はありますか。もし無いようでしたら、これから見つけてみてください。その本はきっとあなたの世界を豊かにしてくれると思います。

図書館ガイド

★図書館1階AVルームがリニューアル!★

図書館にはCD約1,300点、DVD約700点の所蔵があります。1階にはAVルームがあり、授業の合間のリラックスタイムに大勢みなさんの利用があります。

AVルームは1997年にできましたが、今年の夏休み中にリニューアルしました。機器を新しくし、椅子は座昇降が簡単にできるリラックスタイプのものになりました。



写真ではブースを1人ずつ使用していますが、各ブースはヘッドホンの差し込み口が2個ありますので、友達と一緒に視聴したいときには2人で利用できるようになっています。



3人で視聴する場合は大型のモニターを利用することができます。



2011年 本学教員の最新刊著作



(今年発行の単独書・共著・分担執筆) 著者の五十音順

- *長田真紀先生 『幼稚園と小学校の教育:初等教育の原理』(東信堂)
2011年4月出版 2,310円 ISBN:978-4798900599 (分担執筆)
- *小野智明先生 『子どもの福祉:児童家庭福祉のしくみと実践』(建帛社)
2011年4月出版 2,205円 ISBN:9784767932873 (共著)
- 『保育者が学ぶ家庭支援論』(建帛社)
2011年4月出版 1,890円 ISBN:9784767932941 (共著)
- 『社会福祉士国家試験過去3年頻出重要問題 2012』(実教出版)
2011年7月 ISBN:9784407324419 (共著)
- *西山秀人先生 iPhone/iPod touchアプリ 角川ビギナーズクラシックス 古典名作を楽しむ
『土佐日記(全)』(イマジニア株式会社 版元:角川学芸出版)
2011年9月出版 iTunes Storeにて購入可 (単独著書)
- 『鳥獣虫魚の文学史 虫の巻』(三弥生書店)
2011年12月(予定) (分担執筆)
- 『和歌文学大系 52 三十六歌仙集 (二)』(明治書院)近刊 (共著)

図書館 ニュース

第12回 七夕文学賞

◆恒例となりました七夕文学賞も、
本年は左記のみなさんの作品が受賞となりました。

優秀賞

俳句
幼児教育学科 一年 永田 真桜
帯締めで足取り軽く夏祭り

佳作

自由詩
幼児教育学科 一年 菅沼 ふゆみ
探しもの
わたしはいつも探しものをしてる。
それはわたしにピッタリの
ずっと眺めていた景色かも
わたししれないし、の居心地のいいと思える
誰かの隣かもしれないかもしれない

きつとそれは遠いようで
近いところにあつて
少し背伸びをしなきヤダメで
頑張って探すと見つからない
わたしはずっと探しものをしてる
すぐ見つからなくてもいいから
ゆっくり、少しずつ
探していく

佳作

自由詩
幼児教育学科 一年 高見澤 加奈
あばあちゃん
私をよく知らない
病院で入院している姿しか
知らないおばあちゃん
私のお父さん
育ててくれたおばあちゃん
お墓参りでありがとう
ちゃんと伝えよう、私の心

佳作

自由詩
幼児教育学科 一年 平井 美保
夏
風が吹いて
セミがいない
あの娘が短いスカート
ひらひらさせたら
夏が来る
風が匂って
蚊に刺され
あの娘の肌が
夏が来た
こんがり焼けたら

※選考・添削は、大橋敦夫図書館長

編集後記 a postscript by the editor

本を取り巻く環境が急速に変化しています。ディスプレイ上で見るのは、辞書だけとっていたら、本そのものも対象となっています。出版社も、書籍と電子書籍とを両睨みの状況です。図書館のあり方も問われている時代です。 大橋敦夫

みすず

第38号 上田女子短期大学附属図書館報 2011.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館紀要委員会
発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
Tel：0268-38-6019 Fax：0268-38-6019
E-Mail：lib@uedawjc.ac.jp